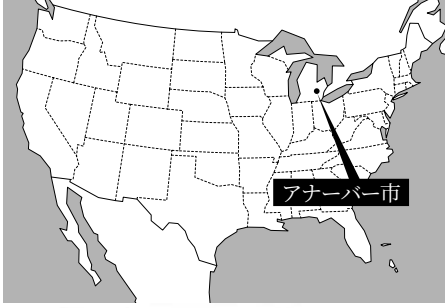

先生たちの見たアナーバーの

姉妹都市学校事情

その1

昨年10月21日から11月3日までの14日間、市内の小学校の先生3人が、アメリカ合衆国への研修に参加しました。

この研修は、市教育委員会が昭和48年から実施しているもので、先生が外国の教育事情や文化、生活習慣などに直接触れることで、国境を越えて視野を広げたり、新しい教育方法の開発に役立てたりすることなどを目的にしています。この研修制度が始まって30年、これまでに45人の先生が派遣されています。

今回は、本市の姉妹都市アナーバー市の小学校6校と中学校1校の計7校で、授業の様子を見学したり、子どもたちに彦根のまちを紹介するなどの活動をしました。今号から3回に分けて、先生たちが見たこと、聞いたことを紹介していただきます。

問い合わせ先　市学校教育課☎㉔7971番　FAX㉓9190番

「個性を生かす」

稲枝東小学校教諭　西村春美

訪問したそれぞれの学校で、個性ある教育が行われていました。どの学校にも共通していることは、子ども一人ひとりに対応した指導をするため、少人数制と複数指導の体制がとられていたことです。1クラスの人数は25人以下と少なく、そこに、2、3人の指導者がいるのが普通の授業風景でした。

担任以外にもアシスタントの教師、教育実習生、ボランティアの保護者などがおられて、きめ細かな指導をされていました。

アナーバー市内の小学校の授業風景

学校は地域にいつも開かれていて、授業も公開されていました。また、どの学校でも「自由の中の自己責任」を小さなころから子どもに求めていたことも共通していました。

指導は、担任に任されている部分が大きく、教室は個性的なものばかりでした。反面、教師に課せられた責任も非常に大きく、例えば、5年ごとに指導法についてのトレーニング（研修）が義務づけられていました。

お互いの違いを認め合うことの大切さ

訪問したほとんどの学校で、さまざまな民族の子どもたちがいっしょに学んでいました。いろいろな国から来た子どもが集まり、それぞれの国についての学習も展開されていました。子どもたちは、そうしたなかで他の国の文化に触れ、自然に国際理解が深まり、「違って当たり前」というお互いを認め合う精神が受け入れられていました。このことは、子どもたちを通じて、保護者にも浸透しています。

習字の授業を通してアナーバーの子どもたちと交流

私は、訪問した小学校で、日本の習字の授業をしました。筆ペンや和紙を使って「山」「川」「月」の漢字がどのようにできたのかを考えながら、楽しく日本の文化に触れてもらいました。授業を通して子どもたちと交流できたことは、私自身にとって貴重な体験でした。

西村先生の習字の授業

「へぇー、アメリカの学校って、そうなんだ」

子どもたちの感想から

研修を終えて帰国した後、授業でアナーバーの学校の様子などを話しました。子どもたちは、私の経験を興味深そうに、目を輝かせて聞いてくれました。

6年生の感想をいくつか紹介します。

- クラスみんなでルールを決めて、それを守れなかったら全員で責任をとる、というやり方が私たちとは違うなあと思いました。
- 「自分の行動に責任を持つ」ということがアメリカの学校の特徴だと思いました。
- 日本では、少しでも人と違うことをすると、特別な目で見られたりするけど、アメリカでは、違ってるのが普通だとみんな思っているそうです。心の広さというものを実感しました。
- 「みんな違って当たり前」という考え方は、すばらしいと思う。黒人も白人もみんな同じ人間だということを、よく分かっているんだと感じました。

今回の研修は、私の教育に対する視野を広げるものでした。この経験を、これからの教育実践に生かしていきたいと考えています。